「互いに平和に過ごす
―指導者への尊敬と教会の平和―」

Ⅰテサロニケ 5:12-13

2021.10.10 南与力町教会 朝の礼拝

序：文脈と主題

・文脈―教会生活についての具体的な勧め

朝の礼拝ではパウロが記しましたテサロニケの信徒への手紙第一から御言葉に聞いています。今日のところからいよいよ最後の部分に入っていきます。新共同訳聖書では「結びの言葉」という小見出しが付けられています。しかしここは単に形式的な結びの言葉ではなく、豊かな内容を持っています。

今日の 5 章 12 節から 22 節にかけてパウロは、教会生活についての具体的な勧めをいくつも語っています。それは私たちの教会生活・信仰生活にとっても大切なものです。ですから私たちはこの部分をざっと読み飛ばすようなことをせず、丁寧に学んでいきたいと思います。

・今日の個所の主題―指導者への態度

今朝はその中の最初の部分 5 章 12 節～13 節の御言葉に耳を傾け、そこで教えられていることを心に留めたいと思います。この個所の主題・テーマは「指導者への態度」です。教会における指導者についてどのような態度を取るべきか、ということです。5 章 12 節から。

「兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ、また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい。」

ここでパウロは教会の兄弟姉妹に対して、「あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々を重んじ」るように、また「愛をもって心から尊敬する」ように、願い求めています。

１．言及されているのはどのような人々か

ここで言及されている「あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々」とはどういう人であったのか、詳しいことはわかりません。ここには「長老」とか「監督」というような称号は出てきません。ただ「主に結ばれた者として導き戒めている人々」という言葉から、教会の中で何らかの指導的立場にあった人々ことだということはわかります。

使徒言行録 14 章 23 節にはパウロとバルナバが、「弟子たちのため教会ごとに長老たちを任命し、断食して祈り、彼らをその信ずる主に任せた」と記されています。これはパウロの第一次宣教旅行においてのことであり、パウロがテサロニケで伝道するのは第二次宣教旅行においてです。ですから、パウロがテサロニケで伝道した時には、すでに他の教会で長老を立てる・任命するということをパウロは行っていたのです。しかし、では今日の個所で言及されている人々はパウロが任命した長老たちのことなのか、というと確かなことはわかりません。使徒言行録（17 章）を読む限り、パウロがテサロニケで長老を任命したということは記されていません。パウロがテサロニケで伝道したのは短い期間であり、パウロたちはユダヤ人たちの迫害によって不本意な形でテサロニケ教会から引き離されてしまったのでした。ですから、パウロたちはテサロニケ教会では正式に長老を任命することはできなかったとも考えら

れるわけです。実際、今日の個所にも「長老」という役職名は出てきていません。もしパウロが「長老」を正式に任命していたのであれば、今日の個所でも「長老」という名称を用いたのではないでしょうか。

しかし、パウロたちが正式に長老を任命していなかったとしても、今日の個所に出てくるように「あなたがたの間（すなわち教会の兄弟姉妹の間）で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている人々」がテサロニケ教会にはいたのです。それは今日の私たちの教会で言えば、牧師や長老に当たるのではないかと思います。

私たちが属する改革派教会は「長老政治」を聖書的なものして採用しています。そして長老政治においては牧師・教師も長老の一種です。教師は「宣教長老」と呼ばれることがあります。御言葉を宣べ伝える、宣教の働きを主に担う「長老」という意味です。一方、私たちが一般的に「長老」と呼んでいるのは、正式には「治会長老」と呼ばれます。「治会」という言葉は特殊なものですが、「治める」という字と、「会衆」の「会」という字から成ります。会衆を治める長老、という意味でしょう。すなわち「宣教長老」と「治会長老」の二種類の長老がおり、共にそれぞれの働きをなしつつ、教会を運営して区。それが基本的に「長老政治」です。さらに「執事」は愛と奉仕のわざを担い、教会をさまざまな面から支えます。そのような私たちの教会では牧師、長老、執事という役職が立てられているのです。

そのような理解に立って、今日の個所の御言葉を読みますと、ここで言及されている人々とは私たちの教会では牧師や長老に当てはまるのではないか、と思います。もちろん「あなたがたの間で労苦している」ということに関しては牧師と長老だけではありません。執事も教会のために様々な面で労苦してくださっています。またそのような役職に着いていない教会員の方々もそれぞれの仕方で奉仕を担い、労苦してくださっています。それはパウロもこの手紙の 1 章 3 節で教会全体に向かって、あなたがたは「愛のために労苦している」と言っている通りです。

ただこの個所に限って言えば、その労苦とは「主に結ばれた者として導き戒めている」そのような類の労苦なのです。ここで「導く」と訳されている言葉は元々「前に立つ」という意味があります。そこから前に立って「指導する」、「導く」、「治める」という意味を持っています。さらには前に立って「守る、助ける、配慮する」という意味もあります。

そして「戒める」と訳されている言葉は「勧告する、訓戒する、諭す」という意味合いがあります。誰かが間違った道を行っていたら、正しい道に立ち帰るよう「諭す、勧告する」。そのような意味で使われる言葉です。

そのように考えていきますと、ここで言及されている「あなたがたの前に立って指導する人々、あなたがたに勧告する人々」とはやはり、私たちの教会では牧師・長老に主に当てはまるのだと思います。

そしてパウロはそういう人々を「重んじるように」、また「愛をもって心から尊敬するように」ここで教会の人々にお願いをしているのです。

２．教会を建て上げるために

ではなぜパウロはそのような勧めをここで、すなわち教会生活に関する具体的な勧めの最初で語っているのでしょうか。そのことを考える上で、今日の個所の直前 5 章 11 節の言葉との関わりを確認しておきたいと思います。5 章 11 節をお読みいたします。

「ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。」
「お互いの向上に心がけなさい」と訳されている言葉は、「お互いに建て上げなさい」という意味を持っています。お互いに励まし合い、そうしてお互いを建て上げていくよう、パウロは勧めていたのです。「お互いを建て上げる」とは言い換えるならば、教会を建て上げていく、また成長していくということでしょう。そのような流れの中で、パウロは教会の指導者を重んじるように勧め、願い求めているのです。それはパウロが教会の指導者を重んじることが、「お互いを建て上げ、成長していくため」に必要なことだと考えていた、ということでしょう。
教会の指導者は「主に結ばれた者として導き戒めている人々」と呼ばれています。「主に結ばれた者として」とは「主にあって」というパウロが好んで使う言葉です。教会の指導者は、自分の思うままに人々を導き、戒めるのではないのです。そうであってはなりません。そうではなく、「主にあって、主に結ばれて」人々を導き、指導し、諭すのです。自分の思いではなく、主の御心、主の御言葉に従って教会を導き、治めていく。それが教会の指導者、具体的には牧師・長老に求められることです。そしてそのような働きは、教会が主イエス・キリストの教会として建て上げられていくために必要なものです。またエフェソ 4:15 の言葉で言えば、教会がキリストの体として「頭であるキリストに向かって成長していく」ために（エフェソ 4:15）必要だということです。主にあって教会の人々を指導し、教え諭す人の働きが教会の成長には必要なのです。ですから、テサロニケ教会にはそのような役割を担う人々が存在し、私たちの教会にもその役割を担う者が立てられているのです。
しかしそのとき、同時に必要なことは、教会の兄弟姉妹がそのような人々を「重んじる」ということです。ここで「重んじる」と訳されている言葉は単純に「知る」という意味の言葉が使われています。そして「知る」とは「認める、承認する」という意味も持ちます。いくら教会のために労苦し、主にあって指導し、諭す人々がいても、教会の人たちがその人たちを認めなければ、承認しなければ、重んじなければ、その働きは無意味に終わります。何の効果も及ぼさない。それが教会の成長、建設につながっていかないのです。いくら牧師が苦労して説教を作り語ったとしても、それが聞かれ、受け入れられなければ何の意味もありません。
ですから、パウロはここで、そういう指導者のたちのことを認め、重んじるよう教会の人々に願い求めているのです。

３．彼らの働きのゆえに愛をもって尊敬する

そして 13 節ではさらに次のように勧められています。
「また、そのように働いてくれるのですから、愛をもって心から尊敬しなさい」。

「心から尊敬しなさい」と訳されている言葉は、直訳すると「彼らのことを非常に高く考えなさい」となります。それが「心から尊敬する」ことだと解釈され、そのように翻訳されているわけです。確かに「彼らを非常に高く考える」という言葉には、「彼らを尊敬する」、「敬う」、また 12 節に出てきた「重んじる」という意味合いも含まれているでしょう。
ではなぜ彼らを尊敬すべきなのかと言えば、「そのように働いてくれるのですから」と理由付けがなされています。直訳すると「彼らの働きのゆえに」です。「彼らの働き」とは先ほど 12 節で言われていたように、「あなたがたの間で労苦し、主に結ばれた者として導き戒めている」、そのような「働き」の

ことです。そのような働きのゆえに、彼らのことを愛をもって心から尊敬するように、彼らのことを非常に高く考えるように、パウロは願い求めているのです。

ここでパウロが、「彼の地位や権威のゆえに、彼らを尊敬しなさい」とは言っていない、ということに注意したいと思います。パウロは彼らが高い地位についているから、あるいは権威を持っているから彼らを敬いなさい、従いなさい、とは言っていないのです。そうであれば、それはこの世の権威主義と変わらないことになってしまうでしょう。そして権威を持つものが高慢になり、腐敗するということにもなります。

パウロが教会の人々に彼らの指導者を尊敬するよう言うのは、「彼らの地位や権威」ではなく、「彼らの働きのゆえ」なのです。彼らが教会のために労苦し、主に結ばれた者として人々を導き、教え諭している。そのような働きが前提とされているのです。逆に言えば、そのような働きがなければ、教会はそのような名ばかりの指導者を敬う必要ない、ということにもなるでしょう。ですからこの御言葉は教会の指導者の地位や権威を無条件に肯定するのではなく、むしろその実質的な働きを問うものでもあるのです。

教会の指導者（牧師や長老）は、自らの権威を人々の上に振りかざすべきではありません。マタイによる福音書 20 章 25 節から 28 節（新 p.39）で主イエスは弟子たちに次のように教えられました。
「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

主にあって人々を指導し、導く者には、そのように主イエスにならった姿勢、すなわち「仕えられるためではなく、仕えるため」僕として自分を献げる、そのような姿勢が求められるのです。

使徒パウロもそのような姿勢で教会に仕え、働きました。それは第一テサロニケ 2 章 6,7 節で
「また、あなたがたからもほかの人たちからも、人間の誉れを求めませんでした。わたしたちは、キリストの使徒として権威を主張することができたのです。しかし、あなたがたの間で幼子のようになりました。」

教会の指導的立場にある人々、牧師や長老もそのように幼子のようにへり下り、教会の兄弟姉妹に仕える。そして愛をもって労苦する。そのような働きが求められているのです。

そしてそのような働き、労苦のゆえに、教会の兄弟姉妹はそのような指導者たちを「愛をもって心から尊敬するように」求められています。

・愛の必要性

ここで「愛をもって」と言われていることにも心を留めたいと思います。愛とは、もちろんお互いに、またすべての人に対して持つべきものです。しかし、ここで指導者に対しても愛を持つように、そのような愛をもって彼らを心から尊敬するように言われているのです。

教会の指導者を尊敬できなくなるのは、どういう時でしょうか。それはやはりその指導者の欠けているところ、足りないところを見出したときではないでしょうか。そのとき、牧師や長老に対する批判・非難が起こっていきます。牧師や長老も人間ですから当然足りないところがあり、失敗もしてしまいます。そういったことについて率直に指摘し、注意することは、たとえ牧師や長老に対してであってもなすべきことでしょう。しかしその時の問題は、そこに「愛」が伴っているか、ということだと思います。愛なき批判は、ただの悪口、非難中傷になってしまいます。欠けのある指導者を敬い重んじるためには、愛をもって忍耐し、赦す心が必要です。ですから、「愛をもって」彼らのことを尊敬しなさいと教えられているのです。

４．お互いの間に平和を保つために

そして今日の個所の終わり、13 節後半では次のように教えられています。
「互いに平和に過ごしなさい。」

この言葉は、新改訳聖書では「お互いの間に平和を保ちなさい」と訳されています。これは一見すると、これまで教えられてきた指導者に対する取るべき態度と関係がないように思われるかもしれません。しかし、実は密接に結び付いているのです。

教会の信徒たちが牧師や長老のことを重んじることなく、むしろ愛なき非難や中傷をするようになったらどうでしょうか。その時、教会の平和は脅かされ、失われることになります。

そして実際そのようなことは教会で起こるのだと思います。牧師と信徒、長老と信徒の間に争い、不和が生じる。また牧師と長老や長老同士の間に不和や争いが生じることも起こり得ます。相手に不満を抱き、非難する時、私たちは「自分は正しい、相手が間違っている、向こうが悪い」という思いに捉われます。確かに相手に非があることもあるでしょう。しかしそれを率直に相手に注意するのではなく、不満の心を募らせ、非難と中傷を繰り返すだけだとすれば、「お互いの間に平和を保つ」ことはできません。

先ほど見たように、やはり「愛をもって」、赦し、忍耐する。指導者のことを、その働きにゆえに、愛をもって尊敬する、重んじる。そのようにしてこそ「お互いの間に平和を保つ」ことができるのです。

パウロはこの「平和を保つ」こと、あるいは「平和を追い求める」ことを、他の手紙でも教えています。エフェソの信徒への手紙 4 章 1～3 節（新 p. 355）をお読みいたします。
「そこで、主に結ばれて囚人となっているわたしはあなたがたに勧めます。神から招かれたのですから、その招きにふさわしく歩み、一切高ぶることなく、柔和で、寛容の心を持ちなさい。愛をもって互いに忍耐し、平和のきずなで結ばれて、霊による一致を保つように努めなさい。」

結論：

私たちはそのようにして、「お互いの間で平和を保つ」ことができるよう、教会における平和と一致を追い求めてまいりましょう。